

色一つで変わる印象

「色」を活用したセラピーに「パーソナルカラー診断」があります。パーソナルカラーとは、その人の魅力を引き立て、より奇麗に見せてくれる色のことをいいます。また、人が生まれついて持っているボディーカラー（肌の色・瞳の色・髪の色）に調和する色のグループや、足りない色味を補ってくれる色でもあります。多くの色の中から似合う色、パーソナルカラーを見つけ出せば、コーディネートがブラッシュアップさせてくれます。

似合う色を身に付けていると、明るく生き生き見えたり、若々しく輝いて見えたりと、その人の魅力がさらに引き立ちます。もちろん、接する人たちに好印象を与えるので、コミュニケーションや仕事に対する自信が高まり、良い循環が起こります。逆に似合わない色を身に付けていると顔色が悪く病的に見えたり、寂しげに見えたり、キツく見えたり、品が悪そうに見えたりと、魅力を引き出せないばかりか、悪い印象を与えてしまう場合があります。そして、そのことが自信を失わせ、消極的で控えめな言動・行動に結び付き、悪い循環に陥ってしまうこともあります。一枚のシャツの色で、その人の印象や行動、気持ちまでも大きく変わるので、「色」のパワーって、それほどスゴイのです。✔

似合う「白色」を選ぶ

自身のパーソナルカラーを知れば、すべての場面で上手に活用し、良いイメージを演出することができます。メディセレスクールでは、講師陣・職員にパーソナルカラー診断を受けてもらい、その結果を参考にネクタイやシャツ、スーツを選んでいただいています。しかし、残念ながら会社や学校、職種によって「制服」の着用が義務付けられており、それを妨げられることもしばしばです。例えば、医療従事者もその代表的な職業です。医療従事者の制服といえば、「白衣（スクラブ）」です。最近はいかっこいい医療系TVドラマの影響でしょうか、緑色の手術着やブルーのケーシーを着用されているドクターもいらっしゃいます。ピンクやグリーンなどパステルカラーの「色衣」を着用されている方も増えてきました。色衣のファッションショーを見たこともありますが、まだまだ日本では「医療従事者=白衣」「白衣=お医者さん」というイメージを持たれる方が少なくありません。ただ、「白衣恐怖症」「白衣高血圧」という言葉があるように、患者さまの中には「怖い」「緊張する」などストレスを感じる方もいらっしゃいます。この事柄をパーソナルカラーの観点から、大きく2つに分けますと、次のようになります。✔



第3回 「白衣」から「色衣」へ

すべては
脱ぎ捨てることから
始まります。

見島 恵美子
PANTONE®
(株) Medisere (メディセレ) 社長
NPO法人医療心理学協会理事長
MBAホルダー 認定薬剤師
スポーツファーマシスト カウンセラー

医療経営に

「華」を 活ける

～心理と色彩の応用華学～

A 髪の色や瞳の色が黒。肌の色がピンク系の方

⇒真っ白な「白衣」がお似合いになり、患者さまから良い印象を持たれます。

B 髪の色や瞳の色が茶色。肌の色がオークル系の方

⇒真っ白な白衣では、キツイ・冷たい・威圧的などマイナスの印象を持たれてしまいます。同じ白でも、ミルクキャンディーのように「少し黄味を含んだ白」のほうが良い印象を持たれます。ただし、黄ばんだイメージを連想させないよう、常に清潔感を保つ必要があります。

個性に合わせた「色選び」を

本来、白衣を着るのは、①防汚、②感染予防——の2点が最大の目的です。ですが、血液や薬などで汚れたらすぐ気付き、すぐ着替えるという衛生面の配慮は、「白」以外の色でも、その目的を果たすことができます。医療従事者が自身に似合う色の「勝負服」を着用しても問題ありませんし、それどころか3つのメリットがあります。

- ① 自身に似合う色の「勝負服」を着用することで、モチベーションが高まる。
- ② 白衣に対してマイナスイメージを持っている患者さまの印象を改善できる。
- ③ 明るく楽しい雰囲気や医療従事者と患者さまの距離を縮め、より良い医療を提供できる。

既にさまざまな色衣が市販されています。これらを採用されている医療機関では、「雰囲気明るくなってよい」「楽しそうな看護師さんから元気をもらっている」など患者さまから好感を持たれているようです。初めて身に付けたときには少し違和感があったようですが、「変わったね」が患者さまとのコミュニケーション密度を高めるきっかけになり、さまざまな副次効果をもたらしたことに驚かれています。

このカラフルな色衣は、個人の個性に合わせることも、病院の個性に合わせることもできます。また、役割や診療科によって色分けすることもできます。それぞれの「色」が持つパワーを参考に、その効果を期待して「色」を選んでみるのはいかがでしょうか。